

島根県水産技術センター 漁況情報 平成 29 年 10 月 4 日発行

トビウオ通信 (H29 第 8 号)

(本誌はホームページでもご覧いただけます。ホームページにはバックナンバーもあります。)
<http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/> (TEL 0855-22-1720)

《平成 29 年度マアジ新規加入量調査結果速報》

島根県水産技術センターでは、国立研究開発法人 水産研究・教育機構(日本海区水産研究所、西海区水産研究所)および鳥取県水産試験場、山口県水産研究センターと共同でマアジ幼魚の新規加入量調査を実施しましたので、今回はその結果をお知らせします。なお、本調査は、その年に生まれたマアジの加入状況を早期に把握するために、平成 15 年以降毎年実施しているものです。

結果の概要

- 調査海域全体に、マアジの好適水温帯(16~20℃)が広がっていました。
- マアジ幼魚は調査海域のほぼ全域で万遍なく採集されました。
- 調査結果を基に計算した今年のマアジ幼魚の加入量指数(来遊量の多さ)は、平成 15 年を 1 とすると 2.76 となり、過去 2 番目に高い指標値となりました。
- 今年のマアジ 0 歳魚の漁獲量は昨年を上回ると見込まれます。

マアジ幼魚の採集結果と分布状況

平成 29 年 5 月 9 日から 6 月 15 日にかけて図 1 に示す長崎県男女群島周辺から鳥取県西部の海域における合計 93 地点において、中層トロール網を用いてマアジ幼魚(平成 29 年生まれ)を対象とした漁獲調査を実施しました。その結果、尾叉長 2~4 cm 台サイズを主体に合計 37,690 尾(1 曳網当りの平均採集尾数:405 尾)のマアジ幼魚が採集されました。

採集されたマアジ幼魚の多くは、適水温と考えられる 16~20℃(水深 50m)の水温

帯に分布していました(図1)。分布範囲は例年同様、五島列島から隠岐諸島の広範囲に及び、1 曳網当りの採集尾数が 1,000 尾を超える調査地点も玄海灘から島根県沿岸部を中心に広い範囲で見られ、加入量指数の高かった昨年と類似した状況となりました。このことから、分布密度は全体的に高めの様子がうかがえました。

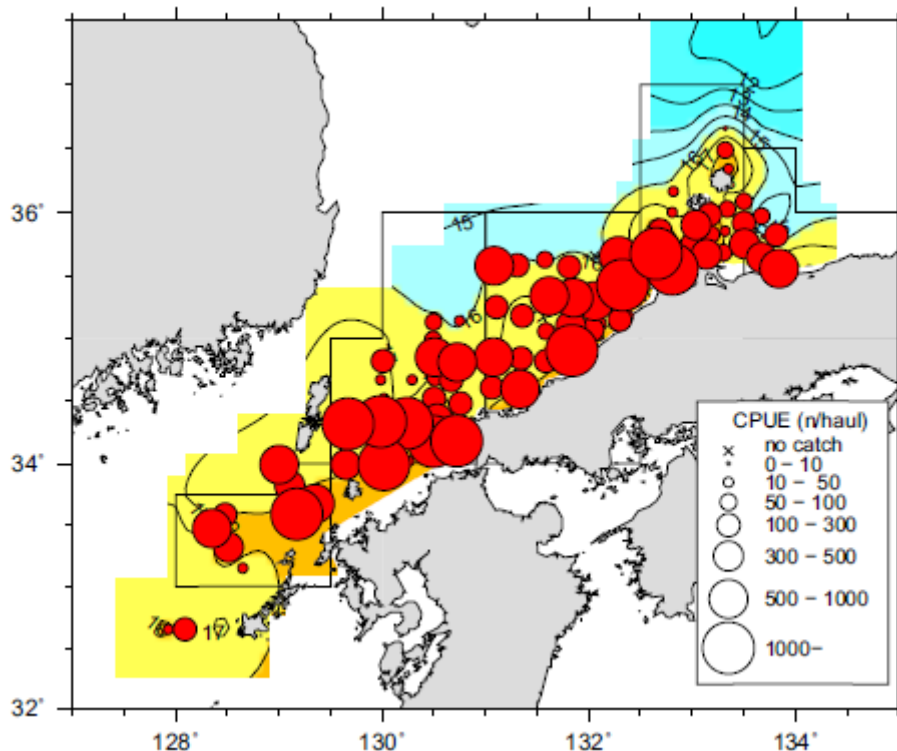


図1 マアジ新規加入量調査における平成 29 年のマアジ幼魚の採集結果
 円の大きさはマアジの採集量の多さを表し、×は採集されなかった点を表す。
 コンター図は水深 50m の水温分布 (16°C以下が青色、16~18°Cが黄色、18°C以上がオレンジ色) を表し、図中の数字は水温を示す。

(資料：国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所作成)

マアジ幼魚の加入量と今後の漁況

マアジ幼魚の分布量に水深 50m の水温分布を勘案して求めたマアジの加入量指数(来遊量の多さを表します)は、平成 15 年を 1 とすると、今年(2.76)で昨年(2.20)を上回り、過去 2 番目に高い値となりました(図 2)。この加入量指数は、その年の 6 月から 12 月の間に境港でまき網によって水揚げされるマアジ 0 歳魚の漁獲尾数と相関がみられることから、今後の山陰沖におけるマアジ 0 歳魚の漁獲量は昨年を上回ると

見込まれます。

マアジは小型魚のうちに獲るよりも、1年後に成長したものを獲るほうが経済的に有利です。しかし、夏季には他の浮魚類(イワシ類やサバ類)の漁獲が減少するため、マアジ0歳魚が集中的に漁獲されることが多くなります。単価の低い小型魚を獲りすぎてしまうと、単価の高い大型魚の漁獲量が減るだけでなく、将来の産卵親魚の減少につながるため、過度な漁獲圧力がかからないよう適切な管理を行っていくことが大切です。

現在、日本海西部・九州西海域ではマアジ資源等の資源管理を目的として、「日本海西部・九州西海域マアジ(マサバ・マイワシ)広域資源管理方針」が策定され、まき網漁業者を主体に定期的な休漁を設けたり、小型魚を漁獲状況に応じて獲り控える等の取り組みが実施され、小型魚への過度な漁獲圧力の削減に努めています。こうした取り組みを着実に実施することで、マアジ資源の持続的な利用につながることを期待しています。

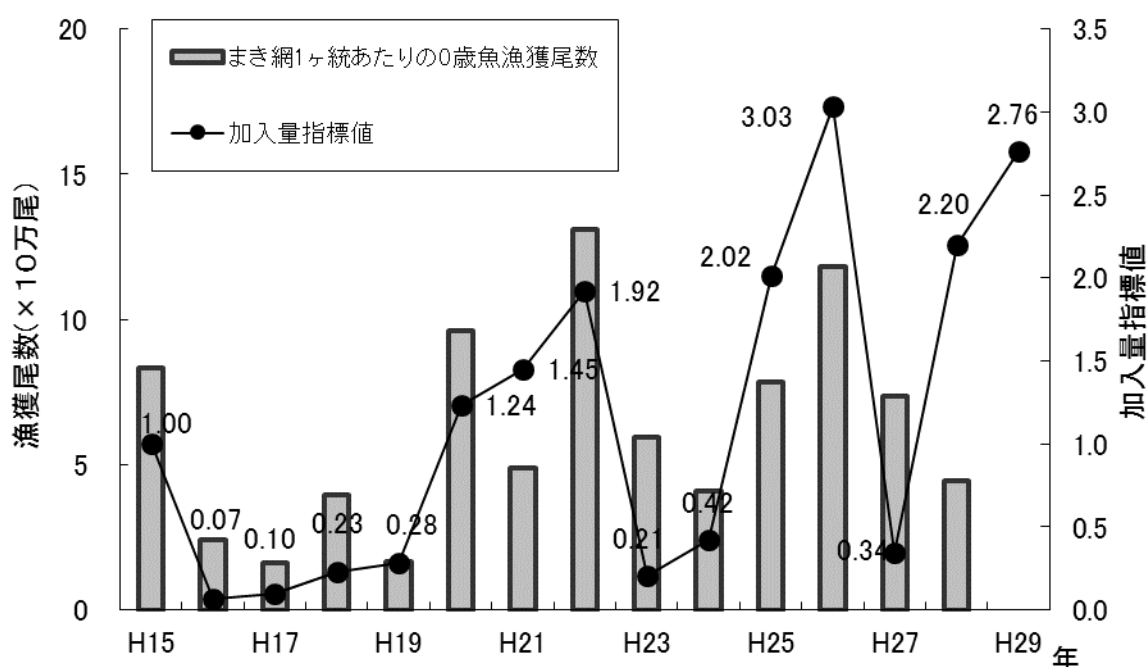


図2 マアジ幼魚の加入量指数と境港におけるまき網1ヶ統あたりのマアジ0歳魚の漁獲尾数*の年動向

*6~12月に境港に水揚げされたマアジ0歳魚の尾数を水揚げしたまき網漁船の数で割ったもの(鳥取県水産試験場集計)